

清末小説『老残遊記』考

——魯迅の「譴責」評価から——

秋吉 收

(平成九年十一月十二日受理)

『老残遊記』と言えば、「譴責小説」である。なぜか。それは当時の官界の腐敗を弾劾し摘発したからである、とされる。そしてそのことを最初に提起したのは魯迅であった。

清朝末期に書かれた『老残遊記』は、雑誌『繡像小説』に掲載され初めて世に出た一九〇三年から現在に至るまで多くの読者を獲得しており、北京人民文学出版社は現在でも重版を重ねているし、日本でもつとに翻訳がある。作品自体の人氣に並行して諸種の評価が為されてきたが、それらは大きく、魯迅が『中国小説史略』(一九二四年)の中で与えた「譴責小説」としての評価、そして胡適の『亜東版『老残遊記』序』(一九二五年)に端を発する「描写の技術」に対する評価の二つに集約することができそうである。

まず、魯迅の評価から見ていこう。彼は『中国小説史略』中、第二十八篇「清末之譴責小説」と題して、李宝嘉の『官場現形記』、吳沃堯の『二十年目睹之怪現狀』、劉鶚の『老残遊記』、曾樸の『孽海花』の四篇を挙げている。

光緒庚子(一九〇〇)以後、「譴責」小説が特に盛んに書かれ

るようになった。(中略)それは小説において隠されていることを摘発し、弊害を暴露し、当時の政治を厳しく糾弾し、あるいはさらに拡大して風俗にまで及んだ。その意義は世の中を匡正することにあり、諷刺小説と同等に見えるけれども、語気が輕薄で、筆鋒に抑制がなく、あまりにも誇張した表現をとって時の人々の好みにあわせさえしたから、その含蓄と技巧の隔たりは大きかった。だから区別して「譴責」小説ということにする。

『老残遊記』については、次のように書いている。

『老残遊記』二十章がある。「洪都百煉生」著と題しているが、實際は、劉鶚の作である。光緒丙午(一九〇六)の秋、上海で書いた序がある。ある人によると、元来、未刊で、最後の数回はその息子の続作だという。劉鶚、字は鉄雲。江蘇省丹徒の人である。若くして数学にくわしく、よく勉強をしたが、放埒でしきたりに縛られなかった。のち、急に後悔して、一年あまり閉じこもって勉学、その後上海で医者として開業したが、ついでまた、それを棄てて商売を学んだところ、その資産をすっかり失った。光緒十四年、黄河が鄭州で決壊した時、劉鶚は同知として呉大澂の下で働き、黄河の治水に功績を立て、名声が非常に高くなって、次第に知府として登用されるまでになった。

北京に二年滞在した時、上書して鉄道の敷設を誓願した。さらに山西に鉅山を開発することを主張し、それが実現すると、世人はこもこも非難して「漢奸」と呼んだ。庚子（一八八〇）の義和団の乱に、劉鶚は、太倉の貯蔵米をヨーロッパ人から安い値段で買った。一説によると、実はそれで困窮者を救済し、これによって生命の助かった者が非常に多かったという。ところが数年後、政府は、太倉の貯蔵米を勝手に売った罪で彼を新疆に流し、彼はそこで死んだ。彼の小説は、鉄英、号を老残という人物の旅行を借りて、その言論や見聞を歴記したもので、風景や事件の叙述にしばしば見るべきものがある。作者の信念もその内に現れているが、官吏を攻撃した箇所も多い。（中略）いわゆる清廉な官吏の憎むべきことは、時に腐敗した官吏よりはるかにひどいことを摘発した。これはそれまで人が言わなかったことを言ったもので、作者自身も大変、得意に思っていた。

この後に魯迅は、雑誌『繡像小説』に掲載された『老残遊記』第十六回に劉鶚自身が付した評語を引用する。

腐敗した官吏の憎らしいことは、誰でも知っているが、清廉な官吏の方がずっと憎らしいことを、人は多く知らない。というのは、腐敗した官吏は、自分自身の欠点を知っているのだからと非道なことはしない。ところが清廉な官吏は、自分が賄賂を取らないから好きなことをしてよいと思ひこんで、自信過剰と自己の偏見でもって振る舞って、小は人を殺し、大は国を誤る。私は、今までどれほどそういう者をこの目で見てきたことか。試みに、徐桐、李秉衡を見よ。その顕著な事例である。

・・・従来の小説は、みな腐敗した官吏の悪を摘発してきた。清廉な官吏の悪を摘発したのは、『老残遊記』より始まる。

「清廉な官吏の悪を摘発した」、魯迅によって取り上げられた作者のこの言葉は、以後現在に至るまでの『老残遊記』評価に欠かすことのできないものとなる。

次に、胡適の評価を見てみよう。『老残遊記』序（一九二五年、上海亞東図書館刊、『単行本』『老残遊記』付）は、著者劉鶚の伝記から詳細な作品論までを展開した長篇の論文である。彼は、やはり清官批判などの思想内容に触れた後で、「老残遊記の文学技術」と題して次のように述べる。

『老残遊記』の中国文学史における最大の貢献は実は作者の思想にではなく、風景や人物描写の能力にある。（中略）『老残遊記』が最も得意とするところは描写の技術である。人を書くことが風景を書くことが、作者は決まり文句や飾り立てた言葉を用いることを潔しとせず、新しい言葉を創出し、実際に即した描写をつねに心がけた。この点において、この書はいまだ誰も成しえなかったものといえることができる。

胡適は、特に「描写の技術」という点で『老残遊記』を高く評価しているが、このことについては、当時彼が提唱していた「白話文学運動」と切り離すことはできない。一九一七年に雑誌『新青年』に発表された「文学改良芻議」^{（注4）}において、彼はすでに「務去爛調套語」（決まり文句や飾り立てた言葉を務めて避ける）「不避俗字俗語」（俗字俗語を避けない）の二項を文学革命の枢要として提唱していたが、そこでも実践上の成就として『老残遊記』を取り上げている。

私は常に言っている、今日の文学で世界「第一流」の文学と比較するに足り、しかも遜色のないものは、ただ白話小説（我

仏山人、南亭亭長、洪都百鍊生「劉鶚・秋吉注」の三人のみ）があるだけだ。それは他でもなく、これらの小説はすべて古人を模倣せず（三人とも儒林外史・水滸・石頭記に力を得ているが、模倣の作ではない）、今日社会の状況を実写し、それ故真正の文学になり得たのである。

胡適の評価は、後に胡適自身が大陸において「反動的」と位置付けられたために、波紋を投げかけることにもなるが、魯迅の「譴責」評価とともに現在に至る『老残遊記』評価の甚大なる基層を形成することになった。『老残遊記』は「描写技術に秀でた」「譴責」小説として文学史の上に揺るぎない地位を築くことになったのである。

二

さて、ここで一つ確認しておかねばならない重要なことがある。『老残遊記』と一言で言ってもその内容は『二集』と『三集』に分かれ、全体としては未刊のままということである。とりわけ『二集』については、発表の経緯等について複雑な問題を孕んでおり、そのことが『老残遊記』の全体評価にも微妙な影を落としている。章回小説たる該書は、『二集二〇回』と、現在確認されている限り『二集九回』から成る。『老残遊記二集』は、『二集』にやや遅れて、一九〇七年に『天津日日新聞』に連載されたが、『二集』が発表後すぐに何種もの単行本に編まれて人口に膾炙していたのとは対照的に、『二集』は一九三〇年代に至ってやっと一回から六回までがまとめて出版されるまで日の目を見ていない。しかも、残りの『二集七回から九回』については、一九六二年に子孫によって「新発見資料」として公開されるまでその存在さえも忘れられた状態

で、実に半世紀以上に亘って眠っていたのである。以下、『二集』発表の経緯について簡単に辿ってみたい。

一九〇七年に『天津日日新聞』に連載された『二集』は、その後再度まとめて単行本として刊行されることもないままに、辛亥革命等の混乱に紛れて、埋もれたままになっていた。『老残遊記二集』が再びその姿を現したのは、一九二九年のことであった。その経緯について、劉鶚の息子の劉大紳の論著「關於『老残遊記』に付された大紳の息子劉厚澤（つまり劉鶚の孫）の注に次のようにある。

一九二九年、『天津日日新聞』の前の主幹、方葉雨がこの新聞社を他人に譲り渡そうとしていたとき、新聞社で働いていた叔父の大經が書庫を整理していて、古い新聞の中から新聞紙上に掲載された『二編（二集・秋吉注）』の何頁かが挟んであるのを発見し、後になってまた新聞から連続して切り抜いて作られた九回本を探し出した。^(注6)

こうして発見された『二集』であったが、直ちに発表されるというわけには行かない。親族間での紆余曲折を経た後、一九三四年に至って當時林語堂主編の雑誌『人間世』に一回から四回までが掲載され、いよいよ翌一九三五年に単行本の形で出版されることになるが、それもまたスムーズには行かなかった。同じく劉厚澤の注から、

（一九三五年三月）良友圖書公司から六回分の単行本が出版された。六回までだけしか出版しなかった原因については、（中略）南京偽国民政府に対して運動を行っていたことによる。先祖（すなわち劉鶚・秋吉注）が清末に没収された浦口地区の

土地を返還してもらえよう要求していたのである。(中略)七から九回については、老残が夢で地獄等を遊歴し、話が神仙や妖怪に説き及んでゐるため、社会的な非難を惹起し、運動に影響が及ぶことを恐れたのである。

かくして、『二集』「七回から九回」は覆い隠されたまま、原本である新聞切り抜き本も不明となったが、唯一、劉大紳が息子の劉厚澤と劉厚滋に手写させていたものだけが命脈を保ち、下って一九六二年の『老殘遊記資料』刊行に至り、ようやく衆目の及ぶところとなったのである。

ここで、小論第一節に引いた魯迅と胡適の評価を振り返ってみたい。魯迅の『中国小説史略』の原稿は一九二三年から二四年にかけて書かれ、また胡適の『老殘遊記』序の掲載された上海重東図書館刊『老殘遊記』は一九二五年に出版されている。亜東図書館本の内容もちろん『二集』二十回のみである。^(注7)つまり、魯迅も胡適も『二集』についてはその存在さえ知らなかった可能性が強いのである。『中国小説史略』中の魯迅の言葉、『老殘遊記』二十章がある。(中略)ある人によると、元来、未刊で、最後の数回はその息子の続作だという。」からもそのことは窺えよう。第一節でも述べたように、現在に至るまで『老殘遊記』評価はこの二人の見解を逸脱するものではない。つまり、『二集』は文学史の上ではほとんど無視され続けてきたのである。

『二集』が評価されない一因は、その内容にある。『一集』の内容は、作者劉鶚自身の黄河治水の経験や、濟南遊歴の途上での見聞、酷吏が人民を虐待する実態、劉鶚が属していた太谷学派思想^(注8)の展開、そして老残が殺人事件を解決するという探偵物語に至るまで多種多様であるが、その舞台はすべて現実世界であった。これに対して、『二集』の内容は非現実の世界へと転回を見せている。

『二集』「一回から六回」までに描かれる泰山の尼寺はまさに仙界であり、登場人物は作者劉鶚の理想を体現している。そして「七回から九回」は、いわゆる入冥譚で、老残が地獄に迷い込み、閻魔大王と謁見して自己の見解を披瀝したり冥界を見て回るといふものである。さらに「九回」の最後は老残は冥界に別れを告げて、いまや天上界に登らんとするということで終わっている。一貫して「実事求是」に象徴される現実主義路線を歩んできた近代中国にあって、『二集』のこの非現実世界は当然のことながら否定されてきた。また魯迅の言葉にも見えるように、小説家というよりもむしろ実業家、活動家であった劉鶚が、事業の失敗という挫折を経て『二集』の筆を執っていることも、『二集』に消極的評価しか与えられない要因になっている。事実、劉鶚は『二集』を書き終えてすぐに遠く新疆への流刑の途につき、そのままそこで亡くなっている。『二集』はまさに劉鶚の失意の集大成というわけである。

清末小説研究者として著名な阿英は、一九五五年に書いた「関於『老殘遊記』——『晚清小説史』改稿の一節」の中で、『二集』の内容に言及して次のように述べている。

『老殘遊記』には二集残卷六回もある。(中略)清朝の官吏と社会の風俗習慣に対する作者の晩年の憤慨がより深く反映されている。また心理描写も前集に比してより緻密で熟達しているが、しかし現実的ではない。このことは作者が数々の挫折を経た後に、「熱い思いはなお有し」ながらも、ついに前途の暗澹たるを感じ、生命は「夢よりも更に虚し」く、「倦怠に堪えない」ものの「出世」に思いを馳せるといふ状態に陥ったことを物語っている。これは『老殘遊記』の作者の世界観が決定づけたところの、必然的に生じた悲劇的結末であった。^(注9)

阿英は執筆当時まだ「七回から九回」の「幽冥譚」を目にしてはいなかったが、それでも「現実的ではない」の一言でその思想内容については全く評価していない。また、次に挙げるのは、一九六二年に出版された『老残遊記資料』の巻頭に冠された編者魏紹昌の「前言」である。この『老残遊記資料』は、前述したように、親族によって隠蔽されていた『二集』『七回から九回』を初めて公刊したものである。

もちろん、作品の成熟度及び社会的影響から述べれば、『老残遊記』の二編と外編はどちらも遠くその初編には及ばない。しかし『老残遊記』そのものの構成部分として或いは近代文学の文献資料として考えれば、この二編、外編の発見は非常に大きな参考価値を有するのである。

二編は二集を指し、初編は一集を指すが、外編とは、やはり『老残遊記資料』において初めて公開された約一巻分の残稿である。この残稿については、不確定要素も多いことから小論では取り上げないこととする。さて、『二編（二集）』『七回から九回』を初めて公刊した記念すべき出版にあつて、最初から『初編（一集）』には遠く及ばないとはあまりに及び腰である。発見当初から子孫によって隠蔽されるほど疎まれ嫌われた『老残遊記二集』は、公刊にあつてもやはり唾棄される運命にあつたようだ。これ以降の中国における評価の変遷を辿ってみると、胡適が高い評価を与えたために『老残遊記』を完全否定する派や、魯迅が評価したことに立脚しながら一部の評価するものなど様々であるが、いずれにしろ『二集』については概して無視される。『老残遊記二集』就中「七回から九回」の生命は、「夢よりも更に虚しく、現在に

至るまで日の目を見ることはないのである。

ここで日本における評価にも触れておきたい。『老残遊記』研究の中心的存在たる樽本照雄氏は論文「劉鉄雲と『老残遊記』」の中で次のように述べておられる。

二集の六回までは尼寺における色恋ざたを女性心理を軸に述べる話であり、第七回からの冥府での話にいたつては仏教思想の影響があるといったところで、やはり荒唐無稽のそしりをまぬかれない。

日本では『老残遊記』研究自体少ないのが現状で、『二集』についてはやはり概ね阿英の評価を逸脱していない状態である。また、『七回から九回』の「幽冥譚」に至つては言及されること自体ほとんどないが、その評価はやはり樽本氏の「荒唐無稽」の言葉に集約されていると言えよう。

三

「作者劉鶚には、『老残遊記』を書くにあつたの一貫した創作意識というものがなかった」。これもまた『老残遊記』評価における一つの共通認識となつているが、この見解は劉鶚の息子の劉大紳が「關於『老残遊記』」の中で次のように述べていることに起因しよう。

『老残遊記』という書は、亡父（劉鶚・秋吉注）が一時の興味で執筆したものである。最初は何らの計画や目的もなく、また組み立てや構成といったものもなかった。当時はただ日に数枚書いて、これを友人に贈つただけであつた。はからずも発表

後、紆余曲折を経て、意外にも流行したのである。

場当たりに思いつくままに書き綴ったものであるから当然、老残が仙界や冥界に遊歴する非現実的な『二集』などは、まだ劉鶚が希望に燃えていた『一集』執筆当時から構想されていたものではあり得ず、挫折の後に失意の中で筆を執った結果が、荒唐無稽な作品世界を生み出したのも自然な成り行きであった、との帰結を見ることになる。だが果たしてそう簡単に片付けてよいものであろうか。否、劉鶚はかなり早い段階から作品世界を仙界や冥界に設定する構想を有していたふしがある。以下、特に作者劉鶚自身によってしたためられた各回の評語に注目しながら、そのことを跡付けてみたい。

『老残遊記』は、一九〇三年八月から一九〇四年一月にかけて、『繡像小説』第九期から十八期にかけて、『二集』の一回から十三回が連載された(第十一回を除く)。評語は連載当初から『繡像小説』に掲載された各回の後ろに付されたものであり、いかにも他人が批評しているような体裁をとりながら、実は作者劉鶚自身が書いたものである。つまりこれは作者自身による『老残遊記』評価であり、その意味で非常に重要な資料である。『老残遊記』『二集』第一回本文は次のような書き出しで始まっている。

山東登州府の東門外に蓬萊山という高い山があり、山の頂に蓬萊閣と呼ばれる樓閣がある。

第一回の評語は、まずこの書き出しに注目している。

白楽天は、「我是玉皇香案吏、謫居猶得住蓬萊」と言っている。この書が蓬萊閣から説き起こされていることから、もともと仙

界の官吏であつた者が人間世界へと落とされて来たのであることがわかる。

劉鶚の記憶違いであろうか、白楽天ではなくこの詩は実際には元稹の「以州宅夸於樂天」という詩の一節である。そのことはおいて、「人間世界へと落とされて来た、仙界の官吏であつた者」とは主人公の老残を指す。『紅樓夢』の主人公賈宝玉ながら、老残もまた人界へと下された天上人であつた。そして賈宝玉が作者曹雪芹の分身であつたと同様に、老残もまた作者劉鶚の分身である。この評語から、劉鶚は『老残遊記』の冒頭から「仙界」へと思いを馳せていたことがわかる。また「謫落(左遷されて流される、落とされる)」の語が見えているが、『老残遊記』執筆当初に劉鶚自身によって書かれたこの評語は、皮肉なことに、新疆へと流されて生涯を閉じた彼自身の運命をはからずも予言する結果となっていた。次に引くのは、『二集』第二回に付された評語である。

以前泰山に旅をしたことがあるが、泰安府から北門を出て登り、斗姥宮をよぎり、……

後に書かれた『二集』一回から六回にかけて、老残は泰山に登り、そこで仙女に見まがう若い尼たちと出会うことになるが、劉鶚は『二集』を書く以前に泰山に登っていた。しかも『老残遊記』の筆を執ったばかりの頃書いた評語の中に、泰安府、斗姥宮など『二集』の舞台となる地名がすではつきりと記されているのである。次は、『二集』第八回の評語である。

この女性はいったい誰であろう? 幽霊(原文「鬼」…秋吉注)か? 仙女か? はたまた妖怪か? 私は次の回を読むの

が待ち遠しくてたまらない。

幽霊に仙女に妖怪と、劉鶚の異界への傾倒が窺われる部分であるが、それは同時に『二集』の構想へも直結したものである。そして続く第九回の評語には、中国における「幽霊（鬼）」文学の代表的作家の名前が見えている。原文を挙げる。

詩在郭璞、曹唐之間、文合留仙、西河而一。

「詩」は、西晋の「郭璞」と「曹唐」（未詳…伝説上の人物か）に比肩し、「文」は「留仙」つまり『聊斎志異』の作者蒲松齡（留仙は字）と「西河」（すなわち伝説上の仙人、呉剛。月に謫せられて月桂樹を伐っているという。）を併せて一つにしたように言うのである。このことは劉鶚が、同じ清代の初頭に書かれた怪奇小説集『聊斎志異』を読んでいたことの証左であると同時に、「文」の代表としてあえて蒲松齡とそして伝説上の仙人を挙げることに、劉鶚自身の思想が反映されていると言えよう。劉鶚は、事業の失敗による失意の淵から初めて「幽霊」文学の筆を執ったのではなく、もともと強い志向を有していたことが明白である。最後に、『二集』第一回の本文から引用する。

「君は黄竜子と幾日も一緒にいて、天国と地獄が結局あるかないか聞いたかね。」

（中略）

老残は轎の上で、泰安城の西南にまるっこい山があつて、頂上には大きな廟があり、あたりに樹木が非常に多いのを見て、きつと有名な場所にちがいないと思ひ、轎夫にたずねた、「城の西南のあの廟のある山、知ってるだろう、何て名前だ？」轎夫

が、「あれは蒿里山といって、頂上は閻魔王の廟、山麓には金橋、銀橋、奈河橋があり、人が死ぬとみんなここを通るので、生きてるうちにたくさんお焼香して、死後の便宜をはかるんでさあ」

『老残遊記二集』の舞台は泰山に設定されている。泰山は昔から靈山として崇敬され、道教に言う仙人の住む所と言われて来たことは、「仙界」設定に格好の場所であつたろう。更に「泰山」は、『搜神記』などでも描かれているように、冥府の長官である泰山府君のいる場所であり、そこには冥界への入口があると考えられていた。ここには、閻魔王の名前も見えている。劉鶚は、「仙界」を描く次の段階として「冥界」を既に意識し、「泰山」を、老残が「冥界」へ入る手段としておさえていたのである。

本節引用部分以外にも、『一集』執筆当初から、劉鶚の筆の下には「仙」や「鬼」がたびたび登場しており、評語で『老残遊記』自体を『聊斎志異』になぞらえたことにも表明されているように、劉鶚は『二集』を書き出す以前の早い段階、彼が社会においても進取の氣象に溢れていた当時から「仙界」や「冥界」文学に興味を持っていた。『二集』にこれらの世界が描かれていることは何ら唐突なことではない。とりわけ劉鶚の退嬰の象徴の如くに見做される『二集』七回以降の「幽冥譚」にしても、それは決して失望のメルクマールではないと考えざるを得ない。

四

本節で取り上げようとする『二集』「七回から九回」は、「幽冥譚」つまり老残が冥界遊行の旅に出る話である。仙界泰山から下りてきた老残は、自宅に戻つてのんびりしていたが、ある日、「大円覚経」を読みながらついうとうと眠り込んでしまい、夢の中に

閻魔大王からの使いが現れ、死の到来を老残に告げるとどこかに行ってしまった。老残は、どうしようもないのでやはり寝ようと思つて寢室まで来ると、何とベッドの上にはちゃんと自分が寝ているのであった。「七回」本文より引用する。

寢室まで行くと、とばりが垂れていて、寢台の前に靴が脱いで置いてある。「はて、私のベッドにいったい誰が寝ているんだ。」とばりを掲げて見ると、なんとそこには老残自身がぐつすり寝入っているのであった。「どうして私が二人も存在しよう、ベッドの私を起こして確かめなければ。」そう思つて力の限り揺すつてみるのだが、どうしたことか少しも動かすことができない。老残は納得して頷いた。「今ここに立っているのが真の自分で、ベッドに寝ているのは僕の屍なんだな。」

こうして老残の魂は、自分の屍に別れを告げて冥界への旅に出ることになる。ところで、魂が肉体から離れるという筋書きは劉鶚のオリジナルではない。このベッドの屍のシーンは六朝志怪小説の一つである『搜神後記』の中に見える「離魂」を想起させる。

宋のころ、その姓は伝えられていないが、一人の男がいた。あるとき、妻と同じベッドに寝ていたが、朝になり、妻が先に起きて外へ出ていったあとで、彼も続いて外出した。ところが、妻が外から帰ってきてみると夫はまだふとんの中で眠っていた。そこへ下男が外から入ってきて、「どんな様が鏡がほしいと言つておられます」と言う。妻は下男が嘘をついているのだと思ひ、ベッドの上を指さして下男に見せた。だが下男は、「おらあほんとうにどんな様のところから来たんで」と言い張る。そして下男は外にいる夫のところへ走つていつてこのことを報告した。

夫はびっくり仰天し、とつて返して妻と二人でしらべてみた。ふとんの中の男は気持ちよさそうにぐつすり寝入っている。見たところ、外見はまさに夫と瓜二つである。ひよつとしたらこれは自分の魂ではないかと思ひ、うつかり目を醒ましては大変だ、というわけで、夫婦でそろりとベッドを撫でてみた。すると、ふとんの中の男は少しづつベッドの敷物の中に吸いこまれ、やがて見えなくなつてしまった。夫婦は、あまりの恐ろしさにいつまでも身震いが止まらなかった。それから間もなく、夫は突然病氣になつたかと思うと、精神錯乱状態におちいり、そのまま一生なおらなかったという。^(注17)

「離魂」のテーマは、この他にも、同じ六朝志怪小説で劉義慶の『幽明録』に収められる「龐阿」という話^(注18)、また唐代伝奇に数えられる唐・陳玄祐の「離魂記」などに描かれており、中国の幽霊文学の伝統的題材と言える。『幽明録』の「龐阿」と、唐代伝奇の「離魂記」は、懷いを寄せる恋人のもとへ魂が肉体を離れて会いに行くという話であり、劉鶚が直接依つたのは恐らく引用した『搜神後記』の「離魂」であろう。実はこの「離魂」に止まらず、『二集』七回から九回の「幽冥譚」を仔細に読んでいくと、劉鶚が中国の幽霊文学の伝統をいかに自作に溶け込ませているかが明らかにになる。ここでは特に影響関係が顕著な二作品について『老残遊記』と対照していくことにしよう。

最初に取り上げるのは、明・瞿佑著『剪燈新話』の中の「令狐生冥夢録」という話である。主人公の令狐驪という男が、鬼卒に連れられて閻魔庁にやつて来て閻魔大王にまみえる場面がある。

見るとこの閻魔の庁、この世の役所と変わりが無い。二匹の鬼卒が驪を連れて門に入る。はるか殿上をのぞむと、大王が晃

旒をかぶり、紅袍を着て、机をすえて座っていた。

次に『老残遊記』から、老残が閻魔大王の宮殿にやって来る場面がどのように描かれているか見てみよう。

広い渡り廊下も砂利敷きで、現世の宮殿と作りは同じ、それよりも少し大きいようだ。(中略) 壇を西側から上って行くと、まさしく閻魔大王が中央の大きな文机に座っているのが見えた。冕旒を垂らし、古式の衣冠に身をおおい、白面黒鬚、たいそう厳肅な中にも柔和な雰囲気を感じている。

次に、地獄の役所の情景について見てみたい。『令狐生冥夢録』では次のように描かれている。

黒い霧が天にみなぎって、頭は牛で顔は馬、身体の色は青くて、紺色の髪、短いズボンをはいた守衛がたくさんおり、おのおの手に狼牙棍を持っている。

『老残遊記』ではどうだろうか。

法廷には牛頭と馬頭がいて、それぞれ手には狼牙棒を握っている。(中略) 立ちどころに毒愁雲霧が立ちこめ、宮殿を覆い尽くしてしまった。

次に、地獄での処刑について、『令狐生冥夢録』から、

地獄は深くして、いかめしくも十殿をつらね、裂く、焼く、搗く、碾く、の刑をもうけ、輪廻応報を説くは、善をすすめ、

悪をこらすためならん。まことに厳格なる法、公正なる道と言ふべし。しかれどもその威令の行われるところ、前のみ見て後は見えず、その見るところ、小の察して大は忘れる。

『老残遊記』でも、閻魔大王がそのことに触れている。

冥界に刑法のあるゆえんのは、人の悪性を取り除くことである。悲しいかな、これほどの重刑をもつても、まだ人の悪性を取り去ってしまうことはできぬ。悪性というものは、初めて生じた時には極めて小さいのであるが、いったん世に現れたが最後、日一日と増長してくる。刑罰を更に重くするには忍びず、然るに人心は悪しきに流れるばかりという情況である。

どちらも、冥界で悪を懲らす為に重刑を用いても、いっこうに罪悪はなくならないことを嘆いている、同じ内容である。次に引くのは、令狐生と、送って来た鬼卒とのやりとりである。

二匹の鬼卒が家まで送ってくれた。譯は鬼卒をかえりみて、「送ってもらったお礼をしたいが、何も差し上げるものがなくて」というと、二匹の鬼卒は笑って、「おれなんかいいませんよ。……」

場面は異なるが、老残と、閻魔庁の宮殿の門の入口まで送って来てくれた周家の次男坊との次のようなやりとりがある。

閻魔大王の宮門の前までやって来た。(中略)、「面倒かけてすまなかった、だがあいにく私は持ち合わせがないのだが。」老残がそう言うと、周家の次男坊は「お金なんかいいません、いりま

せん』と言つて、
・
・
・
。

ここともまた、非常によく似ている。これ以外にも、「令狐生冥夢録」と『老残遊記』の類似点として注目される点に、例えば、どちらも「口の災い」をテーマに掲げていることがある。いつも言いたい放題のことを言つて神仏を冒瀆していた令狐生は、閻魔大王から「犁舌地獄」に落とされそうになるし、『老残遊記』では、閻魔大王があらゆる罪業のうちで最も重いものは「口の災い」だと言つて憚らない。これらのことを考え併せるに、この『剪燈新話』の中の「令狐生冥夢録」を劉鶚は読んでおり、材料の一つとしていたと考えられる。

続いて、六朝志怪小説集の一つ『幽明録』の中から、仏教の影響を色濃く反映した地獄めぐりの「趙泰」という話を取り上げ、『老殘遊記』と比べてみることにする。まず最初は、主人公趙泰が冥界にやって来る場面である。

男女あわせて五、六十人が列をつくつて立つていた。主だった役人が五、六人、黒い単衣の上着を着ていた。一人一人順番に姓名を呼ばれたが、わしの名は三十番目にあつたのじや。

『老殘遊記』七回で、閻魔大王の使いの役人が現れて、その役人の帳面に老殘の死ぬ順番が書きつけてあつた。

「……私は今日五十人余りの方に取りつがなければなりません、あなたが、あなたさまの順番は後ろの方なのでございますから。」そう言くと、一枚の書き付けを老残に手渡した。見るとなるほど五十数名の名前が載っており、老残の名前は三十数番目である。

「趙泰」「老殘遊記」とも、自分の名前は、「五、六十人のうちの三十番目」である。数字がぴたりと一致している。次に「趙泰」から、地獄の処刑風景を見てみよう。

ある地獄では、炎の燃えさかる爐があり、そこに大きな釜がすえてあり、その中で罪人を釜ゆでにするわけだ。その中に投げこまれると、からだと頭はばらばらになり、ぐらぐら沸き返る湯の中で浮いたり沈んだりしている。そのそばには、叉を持った鬼卒がひかえており、一方には、三、四百人の亡者が立つて、お互いに抱きあつて泣き悲しみながら、釜になげこまれる順番を待っているのじや。

次に『老殘遊記』から、

宮殿の下に目を遣ると、いつのまにか一つの大きな油鍋が据えつけてある。(中略) そのうちに何人かの阿旁がさきほどの大男の骸骨を担いで炉の前までやって来ると、鉄の刺又につき刺して差し上げた。炉の傍にも台に上ったのが、何人かいて、鉄の刺又で受け取ると、油鍋の中へと投げ込んだ。鍋の傍らの阿旁も油滴のふりかかるとを恐れて、布のようなもので顔を覆っている。一二分も過ぎたであらうか、骸骨は沸り返る油に浮き沈みしつゝ、赤みがかつていたのが真つ白に変わってきた。

紙幅の関係で引用は限られるが、全体的に地獄巡りの描写そのものがよく似ている。また、「趙泰」に次のような場面がある。冥府の役人が言っている。

「生前の所業を問いたただすのじゃ。どのような罪過を犯したか、

どのような功德があるのか、どのような善行をしたか、という具合に。」(中略)「取り立てて申し上げるほどのことは何ひとつしておりませんし、かといって悪事を働いたこともございません」と答えた。

『老残遊記』では、閻魔大王と老残の次のようなやりとりがある。

「おまえは現世にていかなる罪を犯したのであるか。」「私には何の罪を犯したかわかりません。」「どうして自分の罪でありながら自分でわからないことがあり得ようか。」老残は言った、「自分で罪を犯したとわかるような事は、無論していません。為すところのものは皆、自分では罪などないと考えてのことでございます。・・・」

次に、冥界の役人についての記述に注目してみよう。まず、「趙泰」には次のように書いてある。

中には五百人余りの役人が、亡者の名簿と善惡の行状とを照合して、生まれ変わる行先を指示している。

『老残遊記』の記述を見てみよう。老残が閻魔大王との話を終えて、冥界の役人顧思義という人に会う場面である。

机上には紙筆墨硯が並べられ、その傍らには公文書が山と積まれている。(中略)老残は尋ねた「閣下は公務で非常にお忙しい様子ですが、ここには一体幾人のお仲間がおられるのですか。」顧君が答えた「五百余名にございます。」

役所での冥界官吏の仕事ぶり、そして何と言っても、その人数が五百人余りときれいに符合する。

さて、『幽明録』中の「趙泰」という話と『老残遊記』を比較してきたが、内容から設定に至るまで、かなりの場面で似ていると言わざるを得ない。五、六十人のうちの三十番目とか、冥界官吏の数は五百余人である、など、数字がぴたりと一致していることは特に注目される。また、この「趙泰」は二頁ほどの短い話であり、その中にこれほどの符合が見出せるということは、劉鶚が「趙泰」を読んでいたというより、むしろ、彼が机上に本を広げて参照していたとさえ考える。また『老残遊記』の中で、閻魔大王が「これは仏教の話である」とわざわざ言っているところがあるが、これは、劉鶚が「趙泰」の話を始めたとした仏教信仰を奨励する説話を意識していたことの表れとは言えないだろうか。「趙泰」と『老残遊記』の描写について見ると、やはり『老残遊記』の方が詳細である。また話の筋も、かなり複雑化していると言える。彼が古典を確実に押さえていきながら、その上で、自分の思想をそこに着実に織り込んでいった姿勢が窺われる。

「趙泰」について、もう一点注目されるところがある。趙泰は罪業がなかったので、地獄で官吏に推挙されることになる。

訊問がすべて終わると水官監作使に任命され、千人余りをひきつれて三途の川の護岸工事をするようになった。(中略)やがて水官都督に昇進し、各地獄の管理を命じられた。

水利事業の現場監督からその長官へ、これはまさに劉鶚の経歴と一致する。しかも治水事業は、劉鶚の生涯の中で最も誇らしい一頁であった。ここにも、彼が「趙泰」というこの小さな説話に

魅かれた理由の一端を垣間見る気がする。

五

さて、古来、入冥譚といえは、閻魔大王とのやりとりと、地獄の処刑風景描写に留まっていた。それに比して『老残遊記』は地獄の外に地府、つまり地獄の庶民生活の世界を設定したという点で、特徴的である。老残の旅は、「地獄」から「地府」へと駒を進めるのである。第八回の最後に、情景は現世と何ら変わることはないが、空の色合いだけが暗く重々しいという地府の街の様子が描かれている。作品世界をどこまでも押し広げていこうとする劉鶚の姿勢が表れている。そしてそれを更に推し進めたのが、次で扱う「響」の世界である。

「……亡霊はいつたどこに住んでいるのか。人はみな墓の中にいると言うが、この街の様子が現世と変わりないことを思えば、決して墓ではないことは明らかだ。」(中略) 石家の娘は空中のぼおつと黄色い雲のごとく霞んだところを指さして言った。「上の方に見えますでしょうか、あれがあなたの方の地面です。いま足元に踏んでおります、これが私どもの地面です。冥界と現世では天を同じくしてはおりませんが、地もまた同じではありません。もう一層下がりますとそこは亡霊の墓場、響の世界でございます。亡霊は人の世に行つて祟りますが、響もまた亡霊の世界に来て祟りをなします。亡霊が響を恐れることは、人が亡霊を怖がるよりもっとひどいんですよ。」

地府の更に一層下に「響」の住む世界があると言うのである。ここに、作品世界は、天上世界から、人間世界、地府(冥界)、響

の世界まで、縦型の四層構造へと広がっていくことになる。それではこの「響」の世界であるが、これは一体劉鶚の独創であるのかという疑問が起こってくる。清、蒲松齡の『聊齋志異』中の「章阿端」という話に、次のような一節がある。原文を挙げる。

人死爲鬼、鬼死爲響、鬼之畏響、猶人之畏鬼也。

表現は異なるが、基本的な考え方は『老残遊記』と一致している。前に見たように劉鶚は『一集』第九回評語で、『聊齋志異』を高く評価していた。「響」の世界の設定は、ここから導入してきた可能性が強い。劉鶚は、『老残遊記』を書くに当たって、自分の体験をもとにし、当時の現実問題の実態を確実におさへ、また仙界、冥界の話に至っても、太谷学派思想家としての活動から得たものや、古来の作品や資料を収集しそれを検討するという周到な準備により、自然発生的でなく意識的に、詳細な場面設定をしていたのである。

特にこの「冥界遊行」の話を書くにあたって、彼が大変興味深い行動をとっていたことが、『老残遊記資料』中、劉鶚の甥、劉大鈞の「《老残遊記》作者劉鉄雲先生の軼事」に、記録されている。

この北京の住所というのは、驛馬市大街板章路にあたる。建物はとても広大で、数十の部屋があり、すでに築二、三百年にはなっていた。紀曉嵐の『閱微草堂筆記』の中で言っているように、この屋敷は北京の四大幽霊屋敷の一つであった。先生(劉鶚・秋吉注)が借りようとした時は、すでに何年も空き家になつていて、誰も住もうという者がなく、友人たちはみな彼に借りないように忠告した。聞くとところによればこの屋敷は白昼でもしよつちゅう幽霊が出て、幽霊に絞め殺された者までいる

という。先生は一人信じず、恐がりもしなかった。家族は北京に住まず、先生が一人でこの屋敷に住んだ。庭の花園の中に楼阁があって、「小有楼」と言った。うわさによれば幽霊の大本営ということであつたが、先生はなんとそこを書斎にしていたのである。(中略)私が先生の家に住んでいたとき、先生はちょうど『老残遊記』続集を書いており、期日通りに『天津日日新聞』に発表していた。^(注20)

清代の大学者紀昀の著になる『閱微草堂筆記』^(注21)は六朝志怪のスタイルに倣い、多く狐鬼の言を借りて、社会を攻撃、特に宋儒の苛酷な人間批評の態度を批判した書であつた。劉鶚は『閱微草堂筆記』の中の鬼の出るといふ北京の家を一人で借りて、そこで『二集』を書いたといふのである。実際に、『閱微草堂筆記』の中の「西山の某寺の鬼」、「杜奎と幽鬼」などの話には、幽霊(鬼)の出る家に泊まりに行き、そこで幽霊に出会う人が描かれている。^(注22)劉鶚は、単に『聊齋志異』や『閱微草堂筆記』を読んでいただけでなく、実際に出てくる幽霊屋敷にわざわざ入って行って「幽霊もの」を書いたのであつた。そこには、非常に大きな彼の決意が認められる。事業の失敗による思想の退化では説明しきれない強い意志を見ることができるのである。不遇の時代に、人の近寄らぬ幽霊屋敷にこもって、自身を内なる執筆に沈溺させるといふこの行為は、のちに魯迅にも受け継がれていた。『呐喊』自序(一九二二年)に、次のようにある。

S会館には三間の棟があり、むかし、中庭の槐の木で女が首をつつたと伝えられていた。今では、槐の木はもう高くて登れなくなっているが、それでもこの棟にはまだ住む者がいない。何年ものあいだ、私はこの家に住んで古碑の写しをとった。

考察してきたように、劉鶚は『幽明録』や『剪燈新話』や『聊齋志異』や、その他の中国古来の冥界小説を、『二集』を書くにあたって、かなり幅広く熱心に読んでいた。また、彼が『一集』第二回の評語で泰山に言及していることから、私は、劉鶚が早い時期から現実世界―仙界―冥界、という『老残遊記』の構成を綿密に頭に描いていたと考える。

*

『老残遊記』が初めて世に出たのが一九〇三年、それからすでに約一世紀になる。一九二四年、魯迅が『中国小説史略』の中で『譴責小説』という評価を与えて以来、^(注23)『老残遊記』には諸種の評価が行われてきた。その流れを追ってみると、今に至るまでやはり魯迅の「譴責小説」の枠を出てはいない。それは『老残遊記二集九回』が発表された後も『一集』にのみ価値を求め、『二集』は「非現実的な、荒唐無稽の、思想衰弱の」結果として、ずっと無視されてきたからに他ならない。劉鶚が『老残遊記』の中に「仙界」や「冥界」を描いたことが、現実的でないと切り切れるだろうか。劉鶚は、自分の理想と現実社会との間に大きな隔たりを感じ、彼の理想社会たる異界を作品中に描き出すことによって、よりリアルに現世の歪みを露呈することを意図したのではなかったか。

いま、ここで改めて『老残遊記』を『一集』『二集』連続した作品として考えてみたい。『二集』については、現在目にするところができるのは「九回」までであるが、息子の劉大紳によれば、確かに「十四回」までは書かれていたといふ。^(注24)「九回」の最後から想像するに、「十回」以降は老残が天上世界へ遊行する内容であつたろう。劉鶚は、現実社会の歪みを明らかにする為に、現実社会の描写に

留まらず、「仙界」、「冥界」そして「^{せま}瀛界」、「天上世界」へと「遊記」という作品の中で視界を限りなく広げて行き、読者に問題意識を持たせようとした。現実世界を超越したこれら「異界」を設定したのは、より自由な立場で、あくまでもそれをかりて、深刻に現実の問題を論ぜんとした^(注29)が為であったと理解できよう。

つまり、この作品は「譴責小説」というより、「遊記小説」に分類すべきものである。^(注30)『老残遊記』と名付けられているように。

注

- 1 一九四一年、生活社刊（一集二〇回のみ）。一九六五年、平凡社刊東洋文庫51（二集二〇回のみ）。以上、岡崎俊夫訳。一九六九年、平凡社刊中国古典文学大系第五一卷（一集二〇回、二集六回）。岡崎俊夫、飯塚朗（二集）訳。
- 2 胡適『「老残遊記」序』胡適文存 第三集（一九六八年、遠東圖書公司刊）五四七頁。なお、『老残遊記資料』（一九六二年、中華書局刊）一八八頁、『劉鶚及老残遊記資料』（一九八五年、四川人民出版社刊）三六六頁、にも収める。
- 3 『魯迅全集 第九卷』（一九八一年、人民文学出版社刊）二八二頁。なお、翻訳は一九八六年、学習研究社刊『魯迅全集 第十一卷』（今村与志雄訳）及び一九九七年、平凡社刊東洋文庫『中国小説史略』（中島長文訳）を参照した。
- 4 胡適『文学改良芻議』一九一七年『新青年』第二巻第五号。
- 5 『老残遊記二集』の版本として、小論では、京都大学人文科学研究所所蔵、一九〇七年『天津日日新聞』切抜本を使用した。原資料として極めて貴重な当版本について、詳細は、樽本照雄氏「天津日日新聞版『老残遊記二集』について」（一九七六年、中国文芸研究会『野草』第十八号）参照。
- 6 前出『老残遊記資料』九二頁。
- 7 樽本照雄氏『「老残遊記」の版本と修改について』（一九七六年、『大阪経大論集』第一〇九・一一〇合併号）を参照した。
- 8 『山東近代史資料』（一九五七年、山東人民出版社刊）所収「李龍川先生」「張積中及泰州教資料」「黃崖紀事略」。嚴薇青「劉鶚和太谷学派」（前出『劉鶚及老残遊記資料』六三一頁）等参照。
- 9 蒋逸雪『劉鉄雲年譜 光緒三十一（一九〇六）年』『老残遊記資料』一八〇頁。
- 10 阿英『關於「老残遊記」——「晚清小説史」改稿的一節』『小説三談』（一九七九年、上海古籍出版社）二二九頁。
- 11 詳細については、樽本照雄氏『「老残遊記」外編は偽作か』（一九七五年、『啞啞』第五号。同氏著『清末小説閑談』（一九八三年、法律文化社刊）一六二頁。）参照。
- 12 樽本照雄氏「劉鉄雲と『老残遊記』」一九七四年、『大阪経大論集』第九七号。
- 13 背景に『繡像小説』編集部による改竄事件がある。詳細については、劉大紳著『關於「老残遊記」』（前出魏紹昌編『老残遊記資料』五四頁）及び劉厚澤注参照。
- 14 『「老残遊記」初編卷一至卷十七評語』前出『老残遊記資料』六頁。
- 15 元稹「以州宅夸於樂天」『全唐詩』（一九六〇年、中華書局刊）四九九頁。
- 16 晋、干宝撰『搜神記』（一九七九年、中華書局刊）、「挽歌」「蒋濟亡児」等。
- 17 「離魂」晋、陶潜撰『搜神後記』（明、毛晋輯、崇禎中虞山毛氏汲古閣刊『津逮秘書 第十一集』）。日本語訳は、竹田晃著『中国の幽霊』（一九八〇年、東京大学出版会刊）十四頁を参照した。

- 18 「龐阿」『鲁迅全集 第八卷』（一九七三年、人民文学出版社刊）『古小説鈎沈』収載『幽明録』所収。四一七頁。
- 19 「離魂記」『鲁迅全集 第十卷』（一九七三年、人民文学出版社刊）『唐宋传奇集』所収。二〇八頁。
- 20 「令狐生冥夢録」 瞿佑『剪燈新話』 一七九一（乾隆五六）年刊本使用。日本語訳は、飯塚朗訳、平凡社東洋文庫48（一九六五年）を参照した。
- 21 「趙泰」『太平廣記 卷三七七』（一九六一年初版、一九八一年第二次印刷、中華書局刊）二九九六頁。『太平廣記 卷一〇九』同前、七三九頁。「趙泰」の話は、『太平廣記』卷一〇九（応報）には「出幽冥録」として引かれ、卷三七七（再生）には「出冥祥記」として引かれており、双方を比較すると細部にかなりの異同があるので、別系統のテキストによって伝えられたものらしい。『古小説鈎沈』（鲁迅）には、前者（卷一〇九にあるもの）を『幽明録』の中に収めている。前出竹田晃著『中国の幽霊』参照。日本語訳は、平凡社刊東洋文庫43『幽明録・遊仙窟』（一九六五年初版、一九七一年八版）を参照した。
- 22 蒲松齡『聊齋志異』 一九六二年初版、一九七八年新一版、上海古籍出版社刊本を使用した。
- 23 劉大鈞『《老殘遊記》作者劉鉄雲先生の軼事』 前出『老殘遊記資料』一〇七頁。
- 24 紀昀『閱微草堂筆記』（一九八〇年、上海古籍出版社刊）。
- 25 「聊齋志異」「青鳳」も、人が恐れる幽霊屋敷に敢えて入っていく男の話である。
- 26 劉惠蓀著『鉄雲先生年譜長篇』（一九八二年、齊魯書社刊）に収められる劉鶚の「風潮論」（一九〇七年『天津日日新聞』掲載）には、次のようにある。「敢曰洋款何嘗不用哉？ 當籌他日之如何還、勿慮今日之不可借。」「二集」発表時期、依然、意氣軒昂の様子である。
- 27 鲁迅は『二集』の存在さえも知り得なかった。周知の如く、鲁迅は埋もれていた中国の幽霊小説を掘り起こして『古小説鈎沈』（一九一〇年前後編集、一九三八年公刊）を編んだほど、幽霊文学の伝統に注意を払っていた。『二集』を読んでいたら彼の『老殘遊記』評価は何らかの変更を迫られていたかもしれない。
- 28 劉大紳「關於『老殘遊記』」より拙訳にて引用する。「亡父は海北公司（製塩業・蒋逸雪『劉鉄雲年譜』による）を創設したために、北京、上海、東北地方それに朝鮮日本などの地を奔走して、家に落ち着いていたためしはなかった。『老殘遊記』もまたこの間は捨て置かれたのである。海北公司が失敗した後、また執筆に取りかかったが、これがすなわち二編である。毎日『天津日日新聞』に発表していたが、あわせて十四卷であった。」彼は自注で再度「当時書いていたのは確かに十四卷であった。」と念を押している。
- 29 中野美代子氏「清末小説研究その三 風俗小説の系譜（Ⅱ）——いわゆる譴責小説について——」（一九五九年、北海道大学教養部『外国語、外国文学研究』第七号）は、『二集』の解釈において出色である。「本書は、よりフィクション化された人間類型を創造する可能性を含んでいる。そして、その可能性は、遺稿として死後発見された『老殘遊記二集』において、はなはだ不完全ではあるが、現実されたといえよう。（中略）正集における『譴責』的要素をも含む見聞録的形式は、理想小説へと転化するわけであり、それはまた同時に、現実の反映を目指す風俗小説の限界を破ったものであった。が、二集は、何といっても僅か六回の小規模さであるために、劉鉄雲の新しい可能性への模索もまた、あまりにも不完全であることは惜しむべきであった。」「二集」が十四回以上書かれていたことは、「理想小説」との性格をより展開させるも

のであろう。

劉鶚の描いた理想社会は、あるいは日本に重ねられていたかも知れない。そう思わせるほど劉鶚と日本の関係は密接である。『老残遊記』作品中および評語にも「日本」は何度か登場してくるが、劉鶚の實際行動の上にそれは特に顕著である。樽本照雄氏「劉鉄雲と日本人」(一九八七年『清末小説』第一〇号。同氏著『清末小説論集』(一九九二年、法律文化社刊)一三四頁。)はそのことを実証的に跡付けられた労作である。私は特に蒋逸雪著「劉鉄雲年譜」(前出『老残遊記資料』所収)の「一九〇六年」、つまり『老残遊記二集』執筆の前の年の劉鶚の行動に注目したい。

光緒三十二年、丙午(一九〇六)。五十歳。

春、赴日本遊歴。

秋、復遊日本、併納日女榎目夷眞爲妾。

著者の蒋逸雪氏は、次のように注記している。「この年二度日本を訪れているが、目的は不明である。精塩の商売のためという者もあれば、骨董を売りに行ったのだという者もある。どちらが正しいかわからない。」「二集」執筆直前の目的不明の日本渡航。そして日本婦人を妻としていたのである。